

# どこの組のせんせい?

桝田 正子

「ね、アイスクリーム。食べてもいいよ」

砂場で小さな容器に砂と砂利と水を入れてかきまわしていた三歳のT男が、私を見て声をかけた。

「あらおいしそう。ありがとうございます」

しゃがんで食べ始めた私を見ながら、T男は、

「先生、どこの組の先生?」

とたずねた。一瞬、どういう考え方をしたら子ども

にわかりやすいだろうと迷つたが、適当な表現が見

つからないままに、

「先生はね、幼稚園全部の先生」

と答えると、T男はよくわからないといったキョトンとした表情で、

「何の組にいるの?」

と重ねて聞いた。

「先生たちのお部屋にいるの。でも○の組のお部屋

にも△の組のお部屋にも遊びに行くのよ」

と言いながら私は、これもわかりにくいためどかしく思う。案の定、T男は納得がいかないという様

子で、

「フーン」

と言つたが、それ以上はたずねなかつた。  
「ああ、おいしいアイスクリームでした。ごちそう  
さま」

私は、何となく会話が中途半端になつてしまつて

いることにうしろめたさを感じながら、アイスク  
リームに助けを求めるような気持ちで言うと、T男  
は、  
「また来ていいよ」

と、先の明るい調子に戻つて言つた。

もたちにしてみれば、顔見知りではありながら「何  
の組の先生よ」と明解な答の返つてこない先生の立  
場は、幼稚園理解の上でどうもおさまりの悪い存在  
のようで、それがわかるので私も、彼らをなるべく  
混乱させないようにと考え方を迷つてしまふのであ  
る。

幼稚園の環境を自分の生活の場として認識し、そ  
の中で安心して自己を發揮できるようになるまで  
に、子どもたちはそれぞれに様々な様子で状況を受  
けとめ、そのプロセスを経験していくのであらう。  
子どもたちがチラッと見せてくれる姿に、幼稚園の  
場を少しずつ自分自身のものとして、いこうとする様  
子がうかがえるのである。

一学期の間、私はよく、その春入園の特に三歳の  
子どもたちから「どこの組の先生?」とたずねられ  
た。自分が○の組の一人であり、自分の担任の先生  
は○の組の先生、年長のお兄さんやお姉さんもみん  
な△の組や□の組と、所属するところが決まってい  
るらしいことがわかつてくる頃の質問である。子ど  
ど

殆ど毎朝のように、登園時間から約二十分ぐらい  
の間、三歳の保育室の廊下に面した出入口に、その  
組のH子の姿があつた。出入口のドアに片手でつか  
まり上半身を乗り出すようにして、登園してくる母

子たちであわただしい廊下の様子を見ているのである。他の子どもの出入りとぶつかりして、はづ

が、一学期の終り頃にはそんな時に泣くことも減つたようである。

みで廊下に出てしまうこともあるが、あわてて元の

体勢に戻るその姿には、安心できる自分の本拠を確

保しつつ外の世界にも出かけて行きたいH子の気持

ちが表れているように思われた。そして大抵、私が

次々と登園してくる子どもたちを出迎えることにと

りまぎれでいるうちに、いつの間にか入口に近い廊

下や園庭でも遊び始めているH子であり、彼女の笑

顔にふれて私はホッとすることが多かった。担任の

先生の支えがあつたのかもしれない。H子にとって

は、安心して過ごせる自分の保育室とその外側との

間には通過に努力を必要とするほどの隔たりをまだ

感じるのであろう。そのH子は、お弁当の前や降園

時になると泣くことが多かつたと担任から聞いた。

H子のよりどころである保育室がいつもの遊びの雰

囲気からお弁当や降園の支度へと変わっていく時、

彼女の気持ちの安定がフツとゆらぐようであった



おつとりしたD男は、毎朝登園の時玄関に立つて  
いる私を見つけると、ニヤッと笑って、助走をつけ  
るように二、三歩小走りをしてから両足を揃えて  
ピヨンと跳ぶ。無言である。その後はまっすぐ保育  
室に入つて行くのである。三歳の中でも体重のある

D男のその動きは決して軽やかではないが、彼が全身で何かを表現しようとしていることは伝わってくる。いつ頃からその動作をするようになったか、またその動作が何を意味するものなのかはつきりはわからないが、私が彼の動きに合わせて手を打ちながら「ピヨーン」と相槌を打つのを期待するような表情から、D男がその独特的の動作によつて受け容れてくれる人のいる場へ自ら入ろうとしているかのようになつて、いつの間にか私の方も、そんなに私には思われて、心待ちするようになつてきていた。

D男とのユニークな朝一番のコミュニケーションを心待ちするようになつてきていた。

同じく三歳のM子とY子は、一学期後半、背中におぶいひもで人形を背負い、ままごと用の乳母車（ぬいぐるみの動物が乗つていることもあるが空っぽのこともある）を押して、幼稚園の廊下の中ほどに位置する職員室にしばしば顔を見せた。

「おさんばに行くところなの」

「そう、気をつけて行ってらっしゃいね」「うん」「行つてきます」

私が席から立つて職員室の入口まで見送ると、M子とY子はゆうぎ室の方へ向かつて歩いて行く。四歳や五歳の子どもが多く往々来している廊下を、背中に背負つた人形と両手で押して行く乳母車に支えられてようやつと歩いて行くような二人の後姿である。そして多くの場合、私が自分の椅子に戻るか戻らないうちに再び職員室に入つてくる。

「あらMちゃん」とYちゃん

「何もなかつた」

「そう、残念だつたわね。それじゃお部屋まで帰りましようか」

「うん、先生も一緒に帰ろ」

「そうね」

こんな流れで、今度は私も含めて三人で彼女たちの保育室まで戻ることが多かつた。

M子とY子の保育室は廊下の端にある。部屋を出

て廊下を見通すと、つきあたりのゆうぎ室までの間に四歳や五歳の各クラスがあり、思いくにひろげられた遊びやお店屋さんごっこの屋台が見えたりして、楽し気な興味深い光景である。しかし入園後間もない三歳の子どもにとって、自分の部屋やそこに居る担任の先生を後にして長い廊下を歩いて行くことは、簡単なことではないだろうと察することがで

きる。身についた物、手に持った物、扉が開いていて中に見知ったおとながいる途中の部屋、緊張をやらげることができかわり、そして共に行動する仲間、これらすべてがその時の子どもの支えになつてゐるにちがいなく、こゝへして子ども自身の場や生活は少しづつ広がつていくのであろう。

冒頭の事例で「どこの組の先生?」とたずねたT男をキヨトンとさせてしまつた、担任を特にたない私の立場も、ここに挙げたように様々な子どもたちの姿に出会い、彼らの支え手になることもしばし

ばである。しかし、特に年少の子どもの場合、幼稚園を安心できる生活の場ととらえられるようになるには、担任の先生への信頼感が何よりも中心的な基盤である。私は自分と子どもたちの接点が、担任の先生と子どもとの信頼の関係の中に入らずに組み込まれるものであるようと思つてゐる。

M子とY子と共に彼女たちの保育室に帰つた時、部屋に居た担任の先生に、一人が息を弾ませて、「だだいま」「おさんぽに行つてきたの」等と口々に伝える様子を見ると、私はホッとするのである。

一学期になり、子どもたちは一学期とはまたちがう面を見せてくれてもいる。どんな出会いがあり、どんななかかわりができるのだろうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)